

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。）

解答はすべて解答用紙に記入すること。

(1) アナログとかデジタルという言葉も、もう普通に使われる言葉になってしまった。デジタルはディジット、つまり指に由来する言葉である。① 指□□数えるというような、※離散的な量の表示である。

(2) アナログは連続量と訳されることが多いが、もともとはアナ(類似の)とログ(論理)に由来する言葉である。ある量を別の何かの量に変えて表示すること。時間という連続量を、文字盤の上の針の角度で類似させたり、温度を水銀柱の高さで近似させたりする、これらがアナログ表示。いっぽう、デジタル時計では、連続量である時間を数値化する。□ a 化するのだと言ってもいいだろう。連続量を離散量に □ a 化する作業だから、どんなに細かく区切っても、量と量のあいだには空隙くうげきが残る。

(3) われわれはアナログの世界に生きている。1分、2分という区切りに関係なく時間は私のなかを流れているし、空気にもその匂いにも境界はなく、数えることはもちろんできない。

(4) そんな世界にあって、感覚としてアナログを捉えることはできても、それを表現することはできないものである。表現した途端にそれはアナログからデジタルに変換されてしまうからである。アナログ世界は表現不可能性のなかでのみ成立しているとも言える。「今日は38度もあった」と言えば、② 38度という数値は理解できるが、その人が感じている暑さは、38という数値のなかにはない。

(5) 何も数値化だけがデジタル化ではなく、言葉で何かを言い表わす、そのことがすなわちデジタル化そのものなのである。言葉で表わすとは、対象を取り出して、当てはまる言葉に振り分ける、すなわち分節化する作業である。外界の無限の多様性を、有限の言語によって切り分けるといふ作業なのである。

(6) 一本の大きな樹がある。「大きな」という言葉の選択の裏には、「見上げるばかりの」とか「天にも届きそうな」とかの別の表現が、A 潜在的な可能性としては数えきれないほど存在したはずで、そんな可能性をすべて断念し、B 捨象した表現が「大きな樹」という C 便宜的な表現になったのである。「大きな樹」は、その樹の属性の一部ではあっても、その樹の全体性には少しも届いていない。③ 「言葉には尽くせない」という表現自体が、言葉のデジタル性をよく表わしている。

(7) 人は自分の感情をうまく言い表わせない時、言葉のデジタル性を痛感する。言葉と言葉の間にあるはずのもっと適切な表現をめぐって D クトウする。感情を含めたアナログ世界をデジタル表現に移し替えようとするのが、詩歌や文学における言語表現であるとも言える。

(8) 折に触れて④ コミュニケーションの大切さが言われるが、私たちはともすれば、デジタルをデジタルに変換しただけの作業を、コミュニケーションだと E サツカクしがちである。「この文章の意図するところを五〇字以内でまとめよ」式の、言葉の指示機能の F ハンブクレッスンは、□ b 表現を別のデジタル表現に変換する練習にし過ぎない。

(9) もともと言語化できないはずのアナログとしての感情や思想があり、それを言語に無理やりデジタル化して相手に伝えること、それがコミュニケーションの基本である。『哲学事典』（平凡社）は、そのところを、「送り手が記号を G 媒介にして知覚、感情、思考など各種の心的経験を表出し、その内容を受け手に伝える過程」と H テイギしている。ここで言う「記号」とは、ヒトの場合であれば言語ということになるが、動物の場合は、鳴き声や、身振り、威嚇など、□ c な表現がコミュニケーションの「媒介」手段である。ヒトだけが、例外的にコミュニケーションに □ d を用いることが多いのである。

(10) 言語を媒介としているので、受け手としては、どうしても言語の抱え持っている辞書的な情報そのものを、送り手の伝えたかったすべてと考えるてしまいがち。しかし、⑤ 送り手の内部でアナログのデジタル化は、ほとんどの場合、不十分なものであるはずなのである。特に複雑な思考や、あいまいな感情などを伝えようとするときには、デジタル化はほぼ I ミカンのままに送り出されるところとっておいたほうがいいだろう。

(11) 従って、伝えられたほうは、言葉を単にデジタル情報として、その辞書的な意味だけを読み取るのではなく、デジタル情報の J 隙間から漏れてしまったはずの相手の思いや感情を、自分の内部に再現する努力をはじめてコミュニケーションが成立するのである。真のコミュニケーションとは、ついに相手が言語化しきれなかった「間」を読みとろうとする努力以外のものではないはずである。それがデジタル表現のアナログ化であり、別名、「思いやり」とも呼ばれるところのものなのである。

（永田和宏『知の体力』より）

※離散的…連続的ではない様子のこと。

問一 ― AとJについて、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 ― ①「指□□数える」は「あと何日かと一日一日を数えて待つ」際に用いることのある言葉である。□□に入る語を漢字を含む二字で答えなさい。

問三 ― aに入る語として最も適切な語を次の中から選び、記号で答えなさい。(二か所のaには同じ語が入ります。)

ア 量産 イ 標本 ウ 差別 エ 本格 オ 無力

問四 ― ②「38度という数値は理解できるが、その人が感じている暑さは、38という数値のなかにはない」とありますが、感じている暑さが38という数値の中になく理由を説明しなさい。

問五 ― ③「『言葉には尽くせない』という表現自体が、言葉のデジタル性をよく表している」とありますが、その理由を説明した左記の文の空欄にあてはまる言葉を、Iは三字、IIは十五字以内で本文中より抜き出しなさい。

言葉で表現する際に、表現したいことのI(三字)をII(十五字以内)のため、表現し尽くせないから。

問六 ― ④「コミュニケーションの大切さ」とありますが、筆者が述べている、本当のコミュニケーションで必要なものを文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 ― bとdには「アナログ」か「デジタル」という語が入ります。それぞれ左記の記号で答えなさい。

ア アナログ イ デジタル

問八 ― ⑤「送り手の内部でアナログのデジタル化は、ほとんどの場合、不十分なものであるはずなのである」とありますが、その理由を説明した左記の文の□に入る内容を本文中の言葉を用いて、四十文字以上五十文字以内で答えなさい。

アナログのデジタル化は□
四十文字以上五十文字以内
行為だから。

問九 (1)と(11)の段落を内容上、二つに分けるとしたら、後半はどの段落からですか。(1)と(11)の段落番号で答えなさい。

問十 次のア～オのうち、文中で述べている内容として正しいものには○、間違っているものには×で答えなさい。

- ア デジタル化とは数値化することではなく、分節化する作業として、言語で表現することである。
- イ コミュニケーションは人間の世界のみならず、デジタルでのやり取りに移行しつつある。
- ウ 言葉の受け手がデジタル情報の隙間から漏れた思いを再現することでコミュニケーションとなる。
- エ 言葉はアナログの感情を不十分に置き換えたものであり、言語の辞書的な意味が送り手の伝えたいすべてではない。
- オ コミュニケーションで必要なことは、相手に寄り添い、相手の気持ちを自分の言葉で表現することである。

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。）

中学二年生の高城は、吹奏楽部の部長を務めている。小学生の頃に吹奏楽の演奏を聴いて感動して以来、自分も人を感動させる演奏がしたいと憧れている高城は、自分の理想とするような演奏ができない部に対して焦り、いらだっていた。しかし、厳しい練習を強いる高城に対して、部員の牧田からついに「部長をやめてほしい」という声が上がった。顧問の吉野先生の提案で、高城が部長を続けてもいいかどうか、信任投票を行うことになったものの、もはや部に味方などないと考えた高城は、部活動中の音楽室から飛び出してしまった。次の文章は、その翌朝の場面から始まっている。

教室につくとすぐに、※大久保が話しかけてきた。

「部長、昨日は、あのさ……」

おれはじろりと大久保の顔をにらみつけた。大久保がはっとしたように言葉を止める。

その反応に満足してカバンの中身を机に移しはじめると、すぐに「そういう態度ってないと思う！」と怒った声が投げつけられた。声の主は大久保とおなじ打楽器パートの小宮山だった。いつもおとなしいやつだから、そんな声も出せるのかとすこし驚いた。

「大久保くんは、高城くんのことを心配してたんだから。それに、わたしも……」

おれはふん、と **a** で笑った。心配していたなんてどうせ口だけだ。信用できるわけがない。ほんとうはおれがいなくなっ
せいせいしていたんじゃないのか？

大久保と小宮山はおれと話すのをあきらめて自分の席にもどった。まもなく三熊も教室に入ってきたが、おれが無視して教科書をにらんでいると、なにもいわずに自分の席に座った。

午前の授業が終わり、おれは給食当番の仕事で給食を取りにいった。給食室で目についた保温食缶を持ちあげ、大股で教室に帰る。

おれのいらだちは限界を越えそうになっていた。なんでもいいから思いきり殴りつけて壊してしまいたい。そんな凶暴な衝動をこらえながら保温食缶を運んでいると、となりのクラスの※牧田の姿が目に入った。

牧田は給食の配膳が始まるのを待ちながら、おなじ班のやつと笑顔で話していた。憎悪をこめた眼差しで牧田をにらみつけながら、おれがとなりの教室の前を通りすぎた、そのときだった。廊下が急に滑って、おれは前のめりに倒れてしまった。

廊下に落ちた保温食缶が耳障りな音を立てた。落ちたはずみで蓋がはずれ、中身のクリームシチューが大量に床に広がる。その惨状を呆然と見つめ、それから足もとに視線を移すと、だれかの落としたプリントがひらひらと揺れていた。

「くそっ！」

おれは悪態をついて保温食缶を殴りつけた。殴った拳がひどく痛んで顔をしかめる。けれど怒りはまったくおさまらなかった。もっと何度も殴りつけてやりたかった。

雑巾を手に駆けつけたクラスメイトに、**①** おれは「触るな！」と声を荒げた。 そしておびえて動きを止めた相手から雑巾を奪い取り、押し殺した声で告げる。

「おれのミスだ。おれひとりで片づける」

廊下にこぼれたクリームシチューを、おれは乱暴にぬぐいはじめた。手伝いに出てきた連中が、ひとりまたひとりと教室に帰っていった。

ほかのクラスの給食当番が、大きくおれのまわりを避けて通りすぎていった。廊下にはいつくばって掃除を続けていると、おれはひどくみじめな気分になった。くそ、どうしてこんなことになるんだ。どいつもこいつもどうしておれの邪魔ばかりするんだ。おれの邪魔をするな！

おれは再び「くそっ！」と怒鳴って、力いっぱい廊下をこすった。そのときふいに現れたべつの手が、こぼれたクリームシチューを雑巾でぬぐいでした。はっとして顔を上げると、そこにいたのは※三熊だった。

「手を出すなっというてるだろ」

「出すよ。ひとりじゃ時間かかっちゃうでしょ。それに、吹奏楽部の仲間なんだからさ」

気まずそうな笑顔でそういわれて、**②** おれは言葉をなくしてしまった。 おれがぼかんとその顔を見つめると、三熊が教室のほうを振りかえっていった。

「慎吾、この保温食缶、教室に持って行って配りはじめてくれる？」

教室から顔を出してこちらの様子をうかがっていた大久保が、「わかった！」とこたえて保温食缶を取りにきた。大久保はおれを
はげますように笑いかけて、保温食缶を運んでいく。

おれが手を止めているあいだも、三熊はせつせと掃除を続けていた。そんな三熊の姿をながめているうちに、おれは **X** つぶやいていた。

③「……どうしておれば、おまえみたいになれないんだろうな」

三熊が驚いた顔でこつちを見た。おれも思いがけない自分の言葉にうろたえていた。けれどその言葉は、嘘偽りのないおれの本心なのかもしれない。おれが三熊のように親切でやさしく、協調性のある人間だったら、いまみたいに部長の責務を放りだして、吹奏楽部を去るようなことにはなっていないかった。きっと理想的な部長として仲間たちに慕われ、目標に向かっていっしょに頑張ることができていた。

木管パートの練習風景を見て、妙に胸がざわついたのは、三熊のことがうらやましかったせいなのかもしれない。三熊のようにはなれないことがくやしかったのかもしれない。

ひそかにうらやんでいたことが恥ずかしくて、おれが廊下を見つめたまましていると、三熊が静かに口を開いた。「ぼくだって、高城みたいにはなれないよ。ぼくには実力も、みんなを引っ張っていく力もないしさ。それに高城みたいに強くもないから、だれかとぶつかったりするのは苦手なんだ。だから高城の味方をしたくても、みんなに反発されるってわかっていると、なかなか勇気が出せなくて、そのせいで高城につらい思いをさせちゃってごめん」

「おれの味方なんて無理にすることないだろ。おまえはおれの方針に反対なんだから」

視線をそらしてこたえると、すぐに三熊が「そうじゃないよ！」といいかえしてきた。

「たしかに、高城はいつきに部の改革を進めようとするから、それには反対したけど、ぼくも吹奏楽部の空気を変えて、もうちょっと真面目に練習がしたいとは思ってたんだ。夏のコンクールの結果もくやしかったし、単純にもっといい演奏ができるようになるから。ほかのみんなの反応が心配で、高城に協力するどころか、邪魔ばかりしちゃってたけど……」

「おまえが、おれとおなじ気持ちだったっていうのか？」

b を疑っているおれに、三熊がおずおずとうなずいてみせた。そしてまっすぐおれを見つめて言葉を続ける。

「すこしずつ、変えていこうよ。すぐには無理だと思うけど、これからはぼくもちゃんと協力するから」

三熊の眼差しから、強い意志が伝わってくるのを感じた。今朝、小宮山に言葉をかけられたときのように、**a** で笑うことはできなかった。目頭が急に熱くなって、おれはゆがんだ顔を見られないようにうつむいた。

三熊が「これでもう平気かな」といって立ちあがった。途中からほとんど三熊ひとりに掃除をさせてしまっていた。三熊のあとについて教室にもどる途中、おれはその大きな背中に、「三熊」と声をかけた。

「悪かった。ありがとう」

④三熊が目を丸くして振りかえり、おおらかな笑顔を見せた。

教室にもどると、おれの席にはすでに給食が運んであった。量が減ったのはおれのせいだから、責任を取ってクリームシチューは遠慮するつもりだったのに、その器もしっかりトレイに載っていた。**⑤** 器に入っているクリームシチューの量は、普段の半分もなかった。

食事が始まったあと、おれはそのクリームシチューを食べながら、*小学校時代のことを思っていた。いやがらせでほんのわずかしこよそつてもらえなかったクリームシチューは、怒りで味がわからなかった。けれどきょうのクリームシチューの味は、いつもよりやけにあまく、そして温かく感じられた。

給食の器から顔を上げると、となりの班の三熊と目が合った。すこしずつ、変えていこうよ。三熊の声が頭の中で響いた。

おそらくおれが部長を続けることはできないだろう。それでも三熊と協力して、すこしずつ頑張ってみよう。あのおれが感動したような素晴らしい演奏を、吹奏楽部のみんなといっしょにできるように。

はにかむ三熊にぎこちなく笑みをかえして、おれは残りわずかなクリームシチューを大切に味わった。

放課後の音楽室には、ひさしぶりに吹奏楽部の部員が全員そろっていた。牧田たちもきているのは、吉野先生が提案した部長の信任投票がこれから行われるからだ。

「それじゃあ、いま配ったメモ用紙に、高城が部長を続けてもいいなら○を、そうじゃないなら×を書いてこの箱に入れてください。なまえは書かなくていいから。高城はなにかつけくわえたいことある？」

三熊に尋ねられて、首を **c** に振ろうとしたところで、おれは*浅見との会話を思い出した。もしも無駄だったら、あとで文句のひとつもいってやろう。おれはそう決めると、思いきって口を開いた。

「おれは、小六のときに聴いた高校の吹奏楽部のコンサートがきっかけで、吹奏楽をやりたいと思うようになった。そのとき聴いた演奏はほんとうに素晴らしくて、心の底から感動して、おれも中学に入ったら、吹奏楽部でこんな演奏がしたいって、ずっとそう考えていた」

いきなり話しはじめたおれに、部員たちは **Y** していた。こんなことを明かしても、やっぱり意味なんてないんじゃないか。そう疑いながらも、おれはさらに話を続けた。

「だけど、うちの吹奏楽部は練習熱心じゃなくて、去年のアンサンブルコンテストでも夏のコンクールでも、満足な演奏ができてくつやくしかった。だからなんとかしてみんなの意識を変えて、もっと真剣に練習に取り組めるように、この部を改革したかったんだ。そのせいでなごやかだった部活の空気を壊してしまって、迷惑をかけてすまなかった」

これまでおれは、部内に味方はひとりもないと思っていた。けれど三熊は、おれとおなじ思いを抱いてくれていた。もしほかにもそういうやつがいるのなら、そいつにはおれがどうして改革を進めようとしたのか、その理由をわかってもらいたかった。

話を終えたとき、部員の大半はまだ戸惑ったままだった。おれが恥ずかしくなって顔を背けると、三熊のうれしそうな声が聞こえた。

「そんな話、初耳だよ。もっと早く教えてくれたらよかったのに」

三熊のほうを見ないまま、おれは「すまん」と短くこたえた。すると三熊が「ぼくもちよつといいかな」と部員たちに向かって手を挙げて、**⑥ 緊張気味に話**しだした。

「これまでいいだせなかったけど、ほんとうはぼくも、もうちよつとしっかり練習をしたいなって思ってたんだ。いまのたのしいふんいきも好きなんだけど、もっとたくさん練習をして、いい演奏がしたいな、つて。だから、ぼくはまだ、高城に部長を続けてほしいと思ってます」

思いがけない三熊の言葉におれは驚いていた。まわりとぶつかるのは苦手だといっていたのに、反感を買うのがわかっていながら、おれを支持することを表明してくれるなんて。照れくさそうな顔でこちらを向いた三熊に、おれは心の中で感謝した。

(如月かずさ『給食アンサンブル2』より)

※大久保……吹奏楽部の部員で、高城のクラスメイト。

牧田……高城に「部長をやめてほしい」と言った吹奏楽部の部員。高城が部長をやめないなら戻らないと言ってしばらく部活動に来ていない。

三熊……吹奏楽部の副部長で、高城のクラスメイト。

小学校時代のこと……高城は小学校時代にクラスメイトからいやがらせを受けていた時期があり、いやがらせの一つとして、給食当番にわざと

クリームシチューを少なくよそわれたことがあった。これ以降、高城はクリームシチューが好物ではなくなった。

浅見との会話……浅見は高城の近所に住む幼馴染で、中学校のクラスメイト。以前、浅見から「高城がなぜ吹奏楽部を真面目にやりたいと思っているのか、部員に話をしてみたらどうか」と言われたことがあったが、高城は「そんな話しても意味がない」と考え、行動に移さなかった。

問一

a・**b**・**c** について、

- (1) **a** に入る、体の部位を表す語を漢字一字で答えなさい。(二か所の **a** には同じ語が入ります。)
- (2) **b** に入る、体の部位を表す語を漢字一字で答えなさい。
- (3) **c** に入る字を漢字一字で答えなさい。

問二

①「おれは『触るな!』と声を荒げた」とありますが、この時の高城の心情として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 保温食缶に悪態をついている自分の姿を見られたのが恥ずかしいので、一刻も早く自分から離れてほしいと思っている。
- イ 複数人がかりで片付けても効率が悪いし、自分がやったほうが早いので人の手を煩わせるほどでもないと思っている。
- ウ 保温食缶に入ったクリームシチューはとても熱いので、誰かにやけどやけがをさせるわけにはいかないと思っている。
- エ 誰かに自分の尻拭いをされたくないし、そもそも自分にはどうせ信用できる仲間などいないと卑屈になっている。
- オ 雑巾を手に駆け付けたように見えるクラスメイトも、実は自分の邪魔をしに来ているのではと疑心暗鬼になっている。

問三

②「おれは言葉をなくしてしまった」とありますが、その理由を説明しなさい。

問四

X にあてはまる言葉として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 意図的に イ 無意識に ウ 一方的に エ 無責任に

問五 — ③ 「……どうしておれは、おまえみたいになれないんだろうな」という言葉は、高城が三熊に対してどのような気持ちを持っていることの表れですか。本文の言葉を用いて説明しなさい。

問六 — ④ 「三熊が目を丸くして振りかえり、おおらかな笑顔を見せた」とありますが、この時の三熊の心情として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 高城が素直に謝罪と感謝の気持ちを述べたことは予想外で驚きつつも、部活動に対する自分の真剣な気持ちを受け止めてもらえたと感じ、嬉しく感じている。

イ 顔を見られないようにしていたはずの高城が話し掛けてきたことに困惑したが、高城が部長として必要な社交性を取り戻してきたことを喜ばしく思っている。

ウ 高城が部活動のことで迷惑をかけていると自覚し、謝罪したことにとまどいながらも、この様子なら今後は部活動がうまくいくだろうと、胸をなでおろしている。

エ 高城を助けることで恩を売り、部長を続けることを諦めさせようと画策していたが、素直に謝る姿を見て、続けさせてもいいかもしれないと考えを改めている。

オ 小宮山の言葉を素直に受け入れなかった高城が、なぜ自分の言葉は信じるのだろうかといぶかしがっていたが、感謝されたことは素直に嬉しいと感じている。

問七 — ⑤ 「器に入っているクリームシチュー」とありますが、このクリームシチューを食べながら高城はどのように感じていますか。説明した次の文の空欄にあてはまる語を、**I** は十二字、**III** は十八字で本文から抜き出し、**II** は十字以内で考えて答えなさい。

自分が廊下でこぼしてしまったせいで、量は普段の半分もなかったが、小学校時代のクリームシチューが **I** (十二字) のとは違って、今日のクリームシチューからは、三熊や大久保、給食を席に運んでくれたクラスメイトの **II** (十字以内) が感じられ、 **III** (十八字) 感じている。

問八 **Y** にあてはまる言葉を、本文から四字で抜き出しなさい。

問九 — ⑥ 「緊張気味に話しました」とありますが、三熊が「緊張気味」である理由を「これまでは、から。」という形で説明しなさい。